

美という名のエネルギー

vol.6

栗原直弘

(古美術商)

第二章「美」の認識と発生③

「人の美」

前回の第二章の②でお話しした、三つの「美」の内の一つ「天の美」は、人が発生する以前から存在する「美」とも言い換えることができるでしょう。人もまた宇宙の一部であり、動物の一種でありながら、動物と人との境が火と道具の使用であると言われるように、やがて人は道具を使い始め、自らも作り始めます。もちろん始めに作られた物は実用性や利便性だけで、「美」など

意識せずに作られたと想像できますが、私は意外に早く人は「美」に目覚めていたと考えています。そして、「美」の認識もまた、他の動物にはない意識でしょう。

狩猟や採集の道具に始まり、大自然を畏れ敬う祭祀道具など、さまざまな物を作る過程で、それぞれの人の美意識がごく自然に加味されていったことは想像し易く、このような、人が自らや他者のために心地よい物、美しい物を作ろうという意識によって成された「美」を、この論考では「人の美」と呼びます。

さらに、「人の美」は、人に芽生えた時

間や所有という概念とともに、移ろう刹那を物に留め、自らが存在した証をこの時空に刻もうとする自我の顕れでもあり、人は人間性や社会性の拡大とともに美意識を高め、さらなる「美」への欲求によって新たな知恵と技術を生み出し、また、技術や質の追求によって生まれる「美」をも含め、時は正に2010年、動物の骨に始まり宇宙ステーションに至るまで、人はさまざまな物を創造してきました

「理の美」

「天の美」、また前項の「人の美」、そして、もう一つの「美」を、この論考では「理の美」と呼びます。それは、その生まれ自体は「美」を目的としたものではなく、その存在だけでは「美」として認知されない物

を、第三者の理念や理論によって「美」と認識された物を指します。例えば、備前の種壺などのように、元々は日常の雑器として生まれ、いわゆる数寄者や識者と呼ばれる人々が「美」として取り上げたことで、一般にも「美」とされた物と呼ばれます。

古くは、千利休の取り上げた茶道具のように、日常の雑器を「見立て」や「本歌取り」などで茶器としたもので、その多くは「美しい物」の創造を目的としたのではなく、千利休の精神性や世界観によって選択されたことで、「美」と認知された物を指します。

茶道とは、一服の茶を共に喫することに始まり、その作法ばかりでなく、書や道具、茶花や趣向、菓子や懐石、建築や庭、故事来歴など、さまざまな知識と経験を自らの物とし、森羅万象に通じることによって人の世を

究めようとする道で、故に始めに物ありきではなく、先達の見識や精神性を理解するために「箱書」や「伝来」などが重視されるのです

「選択」と「解釈」

近くは、柳宗悦が提唱した「民藝」もまた、その根底にあるイデオロギーを基に、

柳宗悦という偉大な思想家によって取り上げられたエネルギー体であり、これらもまた、「美しい物」を作ろうという意識によって成された物ではありません。「民藝」とは、無作為な造作物の中にも「美」を宿す物があることを知り、そのようなエネルギーと直接感応しようとする意識であり、ある意味では、その当時の既存の「美」や「価値観」から離れることを目的としていたと考えて

います。

このように、「理の美」とは「美」の創造とは違う次元のもので、その存在だけでは「美」と認識されず、第三者の「選択」や「解釈」などを必要とし、経年変化や割れ欠けをも含め、そこに「美」を感じようとする世界であって、むしろ、それらを取り上げた人々に対する評価でもあるのです。

読者の中には、「茶道具」と「民藝」を同じ「美」として扱うことに抵抗のある方もおられるかもしれませんが、しかしそれらは、それぞれの理念や精神性を理解するための方便であり、その存在自体が美しいとは限らないのです。

(次号へ)